

翻訳にあたって

この翻訳集を刊行するにあたって、その経緯を簡単に述べておきたい。この翻訳集の編集者名が示すように、日本地理学会の研究グループ「空間と社会」が母体となっている。系譜的には、当時神戸大学の斎藤光格氏を世話役として1989年4月に結成された日本地理学会の「社会(行動)地理学」研究グループをもとに、1991年4月からこのグループを継承して新潟大学の高津城彰氏を世話役にした「社会地理学の理論と課題」作業グループ、そして1994年4月から高津氏を世話役にしたこの「空間と社会」研究グループと、この何年かの活動蓄積をもとにしている(97年度まで研究グループの活動は認められている)。翻訳の発案は富山大学の浜谷正人氏が、ちょうど自ら翻訳されたP・ジャクソンとS・スミス著の『社会地理学の探検』(大明堂1991年)の発刊に続いて、地理学に良書の翻訳文化を根づかせようという意気込みで、1991年5月14日付けで発刊された「社会地理学の理論と課題」研究グループのニューズレター1号の誌面を利用して、すぐれた地理学論文の翻訳を呼びかけたのがきっかけであった。明確な翻訳論文選択の方針を立てずに、とにかく研究グループのメンバーに呼びかけて翻訳候補論文を選択してもらい、その内容を紹介したのが1992年3月31日の研究グループ宿舎(箱根)時であった。かなり雑多に選択された中から、とりあえず既に古典と呼ばれてもよい、70年代後半から80年代初頭の空間研究の理論指向モノを早急に翻訳する必要があるということで、当初選択されたものとはかなり異なる論文を選択し、翻訳権の依頼を行なったのが1993年11月であった。しかしそれから諸般の事情で印刷にこぎつけるのにまた多くの時間を費やしてしまったことに関しては、印刷のフアンドの問題と、翻訳者の異動などが相次いだことと言うことで、ご寛容願う次第である。早くから完成原稿をいただきながら、一部は草率的な翻訳で終わってしまい、当初予定していた訳者解題もオミットしたこともまたお詫び申し上げねばならない。

ネオ古典と副題に名づけたように、コスグローヴ、グレゴリー、ソジャ氏からいただいた翻訳許可の手紙では、あれ以降関心はかなり変わっており、そのうち最近のも紹介して欲しいとの文面であった。もっと訳すべき論文があることは重々承知している。また一読されても、社会-空間研究の社会 the social の議論ばかりが目につき、具体的物的実在がなかなか出てこない、あるいは最後までうまく読み取れないことに、大きな不満をもたれる向きもあろう。大部分が Ph.D を取得して間もない30歳代の研究者のかげだしのころの論文であり(平均執筆年齢32歳)、既成地理学に対する若々しい対抗と、自らの「お勉強」の披露であった側面も見受けられる。しかし今日のような百家争鳴の欧米の人文地理学のなかでの、社会-空間研究のありようのひとつの原点を日本語で我々がフォローし、院生、学部生クラスが学問の「手習い」として読む必要のある論文であることには間違いない。the social の議論に少なくともこの程度の学識がないと人文地理学の議論ができないのか、これが本当に斯学のスタートラインなのか、もっと卒論に役立つ翻訳をとの声も十分承知している。今後の研究グループの活動に十分反映してゆかねばならないであろう。

この翻訳集を刊行するにあたって、日本地理学会からは刊行のご快諾をいただいたこと、そして研究グループ、作業グループを支えていただいた多くの方々へ感謝いたしたいと存じます。

翻訳者一同を代表して
大阪市立大学 水内俊雄